

コミュニケーションに纏わるペシミズムの克服

—中野重治・渡辺一夫「往復書簡」を手がかりとして—

山田 深雪

(2021年10月5日受理)

Overcoming the Pessimism Associated with Communication
—Using Nakano Shigeharu and Watanabe Kazuo's "Reciprocal Letter" as a guide—

Miyuki Yamada

Abstract: The purpose of this study is to examine the ideological basis for overcoming the pessimism surrounding communication with others with whom we disagree, and to look at the connection to education. For this purpose, the following methods were used. 1) Organize the concepts of "pessimism in communication" and "tolerance of mutual differences". 2) Based on Nakano's criticism in Nakano-Watanabe's "Reciprocal Letter" (1949), I will discuss how to overcome "pessimism in communication." 3) Based on the "tolerance to accept each other's differences" that maintained the connection between Nakano and Watanabe, I look at the connection to education. As a result, it was found that in education, (1) the opportunity to express words as "inner speech (thinking, thinking)" when different opinions are presented, and (2) the experience of explaining and listening to the contents of differences in order to maintain different ideas are important.

Key words: Difference, Disagreement, Pessimism, Tolerance, Communication

キーワード：違い、意見の相違、ペシミズム、寛容、コミュニケーション

1. 問題の所在

論者は、文部科学省研究開発学校指定校において、「未来社会を創造する資質・能力の育成」に向けた新教育課程の開発として、母語と外国語を架橋する「ことばの教育」の開発に携わった（2015年4月～2017年3月）。その際第6学年児童を対象に行った「領域：言語文化」の実践「共に考える：言葉って何だろう」は、論者が教師として最後に行った国語教育実践である。

答えのない問いについて対話をしたことを振り返る

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：難波博孝（主任指導教員）、間瀬茂夫
山元隆春

中で、ヒナタは混沌たる不安を次のように語った。

— 正解かどうかはわからないことを言うことはいいこと。でも、そこで「ちがうじゃない」「これは合っていない」と言われたときにね、発表するときにももとの意見があったわけで…、その伝えたいことを反論や質問をしている人に納得させる方法がわからないから…。

ケンジくんとかは、専門用語とかをいっぱい使ってみんなを納得させるのがとっても上手だけど、ほくはとっても苦手で、ほくが言う「えっ、何言ってるの？」みたいな空気になって。ほくは、話すのがとっても苦手だから。—（授業VTRより、下線は山田による）

「正解かどうかはわからないことを言うことはいいこと。でも、」「伝えたいことを反論や質問をしている

人に納得させる方法がわからないから…」というヒナタが抱える「コミュニケーションに纏わるペシミズム」は、ヒナタ固有のものではない。大学の授業でも対話を行うと、初期段階において必ずヒナタと同じ「言ってもわかってもらえないかも」というコメントが学生より提出される（山田, 2019）。これらのコミュニケーションに纏わるペシミズムの由々しき問題は、「ほくは、話すのがとても苦手だから」とヒナタが語るように、自分の考えを表現することへのコンプレックスに帰結してしまうことにある。

また、対話における能動的に聞く力の育成について研究した萩中（2020）は、学習者（中学3年生）が「沈黙」を怖れる理由について、「相手への気づかみや自分への自信のなさが、『沈黙』への抵抗感の要因になっている」（p.46）と推察しており、それはヒナタの「『えっ、何言ってるの?』みたいな空気」という「間（沈黙）」が、「ほくは、話すのがとても苦手」という「自信のなさ」に連結している様相とも一致する。萩中は、学習者の対話への省察を通して「間」の価値に気づかせる実践を試み、（1）頭では「間（沈黙）」の意義が理解できても容易に克服できるものではないこと、（2）沈黙の要因が「内容について熟考している有意義な沈黙（黙考）」以外にも、「無関心からの沈黙」「困惑からの沈黙」「反発心からの沈黙」等の複数が混在するためその見極めが重要であると指摘している（pp.48-49）。

ヒナタの語りと萩中（2020）の指摘は、コミュニケーションに纏わるペシミズムの内実には、人と人のあいだにある「外言（話す・書く）」としてのことばの相違だけでなく、「内言（思う・考える）」としてのことばの相違も大きく絡んでいることがわかる。しかし、「沈黙」に埋め込まれた内言の解釈は、その場にいる個人に委ねられるため、コミュニケーションに纏わるペシミズムの多くは教師に認識されても、共に学ぶ学習者には認識されることなく学習者の内面に堆積し、「外言（話す・書く）」としてのことばへのコンプレックスに転移するという問題を招いている。

本研究ではこの問題について、互いの相違に関して非難し合うことのない「寛容」という視座のもと、相手の「内言（思う・考える）」にも語りかけながらコミュニケートした中野重治・渡辺一夫「往復書簡」（1949）の考察を手がかりに論じていくことにする。

2. 研究の目的と方法

本研究の目的は、自分と意見が相違している、若しくは相違していることが予想される他者とのコミュニ

ケーションに纏わるペシミズムを乗り越えるための思想的基盤を検討し、教育への接続を展望することである。

そのために次の方法で行う。

①「コミュニケーションに纏わるペシミズム」の概念及び（コミュニケーションに纏わるペシミズムを乗り越えるための概念としての）「互いの相違を受け止める寛容」の概念について整理する。

②中野重治・渡辺一夫「往復書簡」（1949）における中野重治からの批判をもとに、「コミュニケーションに纏わるペシミズム」の克服について考察する。

③中野と渡辺のつながりを維持した「互いの相違を受け止める寛容」について、教育への接続を展望する。

3. 課題克服のための理論

3.1 コミュニケーションに纏わるペシミズム

ペシミズム（pessimism）は、「ラテン語 malus（悪い）の最上級 pessimus から英語の名詞 pessimist や pessimism（悲観主義）が造語され」（シップリー, 1945・梅田他, 2009: 474）しており、最悪の対象は世の中に限ったものではないが、「悲観主義」の他にも「厭世主義」と訳されることが多い。

ペシミズムの思想家・哲学者であるショーペンハウアーについて研究した遠山（2014）は、「ペシミズムには『最悪』という意味はあっても『厭世』という意味はない」（p.164）ことを挙げ、厭世の究極を自殺と捉える一般論から、短絡的にショーペンハウアーが自殺を肯定する厭世主義者と見なさぬよう指摘している（pp.163-164）。ショーペンハウアーは『自殺について』（ショーペンハウアー, 1851・斉藤, 1979: 78）の中で、自殺は仮象的な救済を差し出しているに過ぎず愚かであると述べている（p.78）。故に遠山（2014）はショーペンハウアーの思想について、「ペシミズム（最悪観）」（p.145）と表記している。

ショーペンハウアーのペシミズムは、商人の息子としてヨーロッパを外遊した際に見た強制労働の現場、貧困に喘ぐ人々の暮らしなどの「生の苦悩」の目撃に由来する（pp.21-22）。ショーペンハウアーは、著書『意志と表象としての世界』（ショーペンハウアー, 1819・西尾, 2004）において、「自分の生存の維持のために心をくぐらばかりいる」（Ⅲ p.7）人間の人生は「生存そのものための絶えざる闘争」（Ⅲ p.8）にすぎず、そこから派生する「苦悩を追い払おうとして人はたえず骨折るけれども、せいぜいのところ苦悩の姿を変えることくらいしかできない」（Ⅲ p.14）と述べた。このように「生と苦悩は切っても切れない関係」

(Ⅲ p.156)という思想が彼のベシミズムの基盤にある。そして、生きている限り最悪であるこの世界において苦悩を緩和するために、他人の苦悩を自分の苦悩と同一視する「同情 Mitleiden」=「共に苦しむ『共苦』」を「愛」と説き、人々の連帯を求めた(Ⅲ p.157)。

ベック他(1974)は、自殺未遂に至るほどの絶望した状態の患者が頻繁に言語化する「悲観的な声明(pessimistic statements)」等をもとに絶望感尺度(hopelessness scale)の項目を開発した。その患者らが発する声明の内容の特徴は「未来についての否定的な態度(negative attitudes about the future)」にある。ベック他(1974)は、絶望を将来についての否定的な期待である認知スキーマのシステムとして定義することによって、単に拡散した感情状態だと捉えられ、定量化することが困難だと見なされてきた「絶望」を客体化することに成功した。

谷(2020)は、ベック他(1974)以降の絶望感尺度の研究結果について、絶望感尺度の因子構造が研究者によって定まっていないことを指摘し、谷(1998)の日本語版絶望感尺度について構造的検討を行い、第1因子を「絶望感」、第2因子を「希望の欠如」、第3因子を「未来への不確実性」であるとした。ベック他(1974)は、絶望感尺度の因子構造について、第1因子を「未来に対する感情(Feelings About the Future)」,第2因子を「動機の欠如(Loss of Motivation)」,第3因子を「未来への期待(Future Expectations)」としている。谷(2020)とベック他(1974)の因子構造は、完全一致ではないが、絶望感と「未来に対する肯定的な態度の度合い」は密接な関連があるといえる。

ここまでショーペンハウアーのベシミズム(悲観主義)の概要と絶望状態にある患者の「悲観的な声明(pessimistic statements)」等を基に開発されたベック他の絶望感尺度について見てきた。これらに共通するのは、自分自身、生きること、そして未来への「ネガティブな期待(negative expectancies)」(ベック他, 1974)である。「問題の所在」で述べたヒナタや「沈黙」を怖れる学習者も、自分自身のコミュニケーションを未熟や不十分と捉え、「こんなことを言ったら、相手はどう思うだろう」「言ってもわかってもらえないかも」という未来への不安を抱えている。

以上のことから、本研究における「コミュニケーションに纏わるベシミズム」とは、ショーペンハウアーの生と苦悩は切り離せないというベシミズムの思想を含みながらも、それを認知スキーマとして客観化したベック他(1974)の知見に基づき、「コミュニケーションにおいて生じる、自分自身及び未来へのネガティブな期待」とする。

3.2 互いの相違を受け止める寛容

寛容(tolerationないし tolerance)の概念は、語源である *tolero* がもつ「耐える・我慢する」という意味から、ルネサンス期の宗教戦争を経て17世紀末には「自他の間に見られる思考様式の差異の認識に立って《他者》の立場を容認する体勢」(福島, 2018:182)という積極的な意味へと変容してきた。寛容を政治的な体制の問題から、人間性の問題へと徐々に転換させていったのが、ジョン・ロック(1632-1704)、ヴォルテール(1694-1778)などの思想家たちである。

ロックは、国家の統治者は信仰や良心の問題に何らかの力を持つべきではなく、信仰は個人の自由であり心の納得によることを強く主張した。だが、その一方で、「寛容の限界」も定めた。寛容の適用外となるものは、第一に人間社会に反する意見や必要な市民社会の保全に必要な道徳律に反する意見、第二に神の存在を否定する者、第三に「その教会」に入ることよその国の保護下に入りその君主に奉仕することを前提とした教会である(ロック, 1689・加藤と李, 2018: pp.92-97)。

ヴォルテールはカラス一家の冤罪事件に憤慨し、狂信と差別による悲劇を防ぐために『寛容論』を発表した。彼は、人間はその本性によりあやまちを犯す存在だとしても、人間性を辱めることは罪悪であるとして、その要因となる憎しみと迫害という不寛容を一掃するために、人間が宗教上の寛容と信仰の自由をもつことを主張した(ヴォルテール, 1763・斉藤, 2016)。

しかしながら『不寛容論』の著者である森本(2020)は、ヴォルテール、ロック等に代表されるリベラルで合理主義的な寛容論は「否応なく自分と異なる価値観をもった人と共存してゆく」現代社会に間に合わないと断じる(p.4)。そして、ロックよりも半世紀前に寛容論を唱え、史上初の政教分離社会の建設を実践したロジャー・ウィリアムズの生涯に着目し、寛容論の問い直しを行った(p.10)。森本の結論は、喜んで受け入れられるものはそもそも寛容の対象ではなく、「評価しないけれど受け入れる」「嫌いだけども共存する」という態度こそ寛容の本筋だということである(p.274)。

政治学者のテレサ・ベジャンもウィリアムズの寛容論について研究した一人である。ベジャンは、著書“mere civility”(2017)において「礼節(civility)」の概念を考察し、礼節への呼びかけが自他の相互尊重の名のもとに「礼節のために沈黙する者たち」や「表向きの順応性」を生むという矛盾、さらには礼節の強固な概念がしばしば合理的でないことや道徳性に欠けていると思われるものを会話から追放すると指摘する

(pp.144-149)。故にベジャンは、礼節を正義と誤認し会話が行き詰まることのないように、礼節が他者に向ける「水平」という重要な要素に「寛容」の側面を関係づけた“mere civility”(以降「最低限の礼節」と表記)の概念を提出した。

「最低限の礼節」では、「すでに意見の一致している人々とだけ話をしながら、私達のオープンな心や健全な意見を祝福するのではなく、意見を異にすることを許す際に伴う避けられない軽蔑や不一致を寛容すること」(ベジャン, 2017: 164)を重視する。そのため、意見の不一致の際に必然的に生じる軽蔑や不満も隠さずに伝え、それでもなお、自分とは異なる相手と同じ部屋(場所)に留まり、相手と向き合い続けることが必要となる(ベジャン, 2018)。

ベジャンの「最低限の礼節」は、正に「意見の相違の間にある緊張は永遠の問題であり、解決されることのない」(p.158)ということをも身を以て体験し、それ故に孤独と苦悩を味わったウィリアムズの実践から導き出された現実的で、厳しさのある寛容論である。それに対して森本(2020)は、ウィリアムズの生涯を慮り、「最低限の礼節の基準はもう少し高くてもよいように思う」(p.275)と軽蔑や不満を明言することについては慎重を呈している。しかし、森本自身とベジャンの「最低限の礼節」は、快諾できないことでも「礼節をもって、暴力に訴えず、会話を遮断せずに続けるだけの開放性を維持する」(同)という点で、根本的に共通であると結論づけている。

このように、寛容の概念は寛容が説かれた時代や状況に鍛えられ、宗教や信仰の相違からくる是認や排除という文脈から、意見の相違から生じる沈黙や断絶を生まないための相互的かつ持続的なかわりという文脈へと足場を移してきたといえる。

以上のことから、本研究における(コミュニケーションに纏わるベシミズムを乗り越えるための概念としての)「互いの相違を受け止める寛容」とは、ベジャンと森本に共通する「意見の相違を認め、その相違から生じる不満や緊張とも向き合おうとするスタンス」とする。

ここまで、課題克服のための理論として、「コミュニケーションに纏わるベシミズム」と(コミュニケーションに纏わるベシミズムを乗り越えるための概念としての)「互いの相違を受け止める寛容」という二つの概念について述べてきた。ここからは、これらの概念と中野重治・渡辺一夫「往復書簡」(1949)(以下、「往復書簡」と表記)との関連を考察することで、コミュニケーションに纏わるベシミズムを乗り越えるための思想的基盤を検討していく。

4. 中野重治・渡辺一夫「往復書簡」の考察

4.1 中野重治・渡辺一夫「往復書簡」の意義

まず、この「往復書簡」を考察の対象とした意義について述べる。

『展望』三月号(1949)に掲載された「往復書簡」は、同年1月2日から12日までに中野重治と渡辺一夫の間でかわされた四通の書簡である。「往復書簡」というタイトルに「共産主義と共産主義者について」「外国文学輸入について」という二つのサブタイトルが添えられただけで、書簡の前後には、前書きや後書き等の補足はなく、書簡のみが掲載されている。

書簡〔一通目〕と〔三通目〕の筆者である中野重治(1902-1979)は、文学者として詩や短歌の創作、小説や評論の発表、文学運動等の幅広い活動を行いつつ、日本共産党に入党し1947年より3年間参議院議員を務めた。1957年に党の中央委員に選出されたが、1964年には党の規律違反を理由に除名された。

書簡〔二通目〕と〔四通目〕の筆者である渡辺一夫(1901-1975)は、フランス文学研究者であり日本のユマニストと評される人物である。著書『フランス・ルネサンスの人々』(1964)に収められた12人の評伝は、もともとラブレール『ガルガンチュア物語』『パンタグリユエル物語』の翻訳の下準備としての雑文(覚書)であったが(渡辺1971b: 200-201)、その中には命の平等性、報われない努力、回心、信念と懐疑などの「生々しい人間的課題」(渡辺1971a: 193)に苦悩し歓喜する人間の姿が描かれている。その原本的存在の『フランス・ルネサンス断章』(1950)は、大江健三郎が渡辺に師事する大きなきっかけとなった。

この「往復書簡」では、中野による渡辺の文章への批判がなされているが、大江(1984)はこれを「批判自体がよい理解を生み出す典型的な例」(p.66)と高く評価している。また、「中野の手紙に見られる、渡辺への敬愛のこもった呼びかけ、それと矛盾せぬ渡辺の書きものへの批判、そして中野がそう数多くの人に示さなかったはずの、そのような渡辺へこそその内面の吐露。それらすべてを僕は大切なことに思う。」(大江, 1979: 260, 下線及び傍点は山田による)とも評し、「中野の手紙そのものを、とくに若い人たちが読むことを僕は希望する」(同)と付している。

大江(1979)が「大切なこと」として示した中野から渡辺へのコミュニケーションの様相(上記引用文で論者が下線を施した箇所にあらわれている)からは、ベジャン(2018)の「意見の不一致の際に必然的に生じる軽蔑や不満も隠さずに伝え、それでもなお、自分とは異

なる相手と同じ部屋（場所）に留まり、相手と向き合い続ける」という「最低限の礼節」、延いては「互いの相違を受け止める寛容」の端緒を見取ることができる。また、「そのような渡辺」とは、中野の批判の対象となった言葉（「ならば」という仮定表現のこと：詳細は4.3にて述べる）を書かせた渡辺の内面を指し、「そのような渡辺へこそその内面の吐露」とは、渡辺の内面に語りかけるために中野もまた自身の内面を開放してコミュニケーションした様相を指す。このことは、コミュニケーションに纏わるベシミズムの内実にある、相手の「内言（思う・考える）」としてのことばの相違と向き合うことでもある。

以上のことから、中野と渡辺のあいだのコミュニケーションを考察することで、「コミュニケーションに纏わるベシミズム」を乗り越えるための「互いの相違を受け止める寛容」について検討し、教育への連接を展望したいと考えた。

4.2 「往復書簡」が書かれた背景

「往復書簡」は、元々、中野と渡辺の対談を速記して雑誌に掲載する予定であった。しかし、中野の体調が優れなかったために書面での対談となった（中野・渡辺、1949：37）。なお、書簡の往復は筑摩書房の白井吉見によって行われた（p.39・p.41）。

「往復書簡」が書かれた1949年1月時点において、中野と渡辺が直接対面したことはなかったが（p.33）、書簡の中で中野が1948年に出版した選集の装幀を渡辺に依頼したことやその出来映えや満足度について語られていることから、友好的な関係が築かれていたことが窺える。それでもなお、中野が自身の体調の悪さを押してでもこの書簡を書くに至ったのには理由がある。以下は、往復書簡〔1通目〕の中野の記述である。

わたしはあの二つを、わけても『人間が機械になることは』を感動をもつて読みました。わたしはあなたあてに文章を書こうと思いました。それがわたしの義務であるように獨り合点で感じたのです。しかしわたしは、ついつつかりして、そのことを誰かにしやべつたのかとも思います。それがまわりまわって、これを書かねばならぬことになつたのかとも思います。わたしは後悔はしませんが、あれについて書くとするば論文を書かねばなりませんから、それはまたのこととして、ここでは一部分のことだけを書きます。「文法的」といえるようなことを書きたいと思います。（中野・渡辺、1949：32）（下線は山田による）

最初の「あの二つ」とは、渡辺の評論「文法学者も戦争を呪詛し得ることについて（1948年）」（渡辺、

1970a：503-514）及び「人間が機械になることは避けられないものであろうか？（1948年）」（渡辺、1970a：515-528）を指す。これらの評論について大江（1984）は、1948年に東京国際軍事裁判の最終判決が下り戦犯と呼ばれた政治家たちが釈放される一方で、戦争に傾倒した人間の脆弱さを省みることなく表向きの文化的国家の建設に邁進していく世相が、渡辺の戦争再発に対する深い恐れへと繋がっており、それが文章に反映されていると述べている（pp.64-65）。それは、特に「人間が機械になることは避けられないものであろうか？」の以下【引用①】の下線部に色濃く表れている。

【引用①】

カピタリズムというものは、人間が考え出したものであり、初めは人間の利便幸福のためにあった。もし、これが多くの人間を不幸にするようなところまで硬化してきた以上は、進んでこの制度を変えるか棄てるかせねばならない。人間のくせにこの制度の奴隷となり機械となって、この制度の必然的結末とも言える戦争まで起すことは、笑うべき愚挙である。しかし、カピタリズムとともに発達してきた機械文明の病弊が、人間をまひさせ、人間の良心を奪った結果であろうか、人間には、頑強に、未だに戦争を欲しているところがある。しかし、戦争を望む人間は、自分が制度の奴隷となり機械となっていることを悟らねばならず、それがどのくらい非人間的な愚昧なことかも判らねばならぬ。（渡辺、1970a：522）（傍点は渡辺、下線は山田による）

往復書簡〔1通目：中野筆〕の記述からは、「人間が機械になることは避けられないものであろうか？」に綴られた渡辺の思想に満ちた文章を「感動をもつて」読んだ中野が、「ついつつかりして」放った渡辺の文章への見解が意図に反して渡辺に届くことを危惧し、この書簡を書いていることがわかる。にもかかわらず中野は、渡辺に対する弁明や謝罪に終始することなく、あえて『『文法的』』といえるようなこと」と前置きを述べてから批判を行ったのである。

4.3 中野重治からの批判

中野は書簡〔一通目〕において、渡辺の評論「人間が機械になることは避けられないものであろうか？（1948年）」について、複数の「文法的」な錯誤を批判している。

本節では、「コミュニケーションに纏わるベシミズム」と（コミュニケーションに纏わるベシミズムを乗り越えるための概念としての）「互いの相違を受け止める寛容」の検討に関わるものとして、渡辺の「なら

ば」という仮定表現の使い方に対する中野の批判を中心に見ていくこととする。

以下の【引用②～⑤】は、中野からの批判に関わる渡辺の評論「人間が機械になることは避けられないものであろうか?」の一部を抽出したものである。なお、【引用①】と【引用②】は連続した文章であり、【引用①】～【引用⑤】は叙述の順である。また、渡辺の著作集(1970a)から引用しているため、「往復書簡」(1949)とは異なり新字新仮名遣いであることを補足しておく。

【引用②】

Kommunismusも人間の利便幸福のために、人間が考え出した思想・制度である。この根本を忘れては、何の思想ぞと言わねばならない。コミュニスト国家といえども近代機械文明に助けられて成長してゆくことは当然であるが、新しい理念の下に作られた新しい人間が、いつの間にか、近代機械文明の病毒に犯されるとともに、己の属する制度やイデオロジーの奴隷となり機械となることは、避けねばならぬ筈であろう。歴史的必然を実証するために、コミュニストたちは、どうしても、カピタリズムの人々と血みどろな「戦争」をせねばならぬと考えるのであろうか? (渡辺, 1970a : 522-523) (傍点は渡辺, 下線は山田による)

【引用③】

「戦争は階級闘争の形をとる」ということは、階級闘争によって Kommunismus の樹立を行うために戦争を要求せねばならぬということの意味するのではなからう。階級闘争とは現実であって観念ではない。もしこうした観念の機械となって、コミュニストがもし戦争を求めたら、それはコミュニストではない。 (渡辺, 1970a : 523) (下線は山田による)

【引用④】

人間が機械や制度やイデオロジーや或は神の奴隷となり道具となって、死闘して、必然性に則した人々が生き残るといのが、ルネサンス以後人間の獲得した人間解放の結末ならば、またそれが歴史的必然であるならば、私の主張ごときは、正に甘いも甘い大甘な反動言辭となるだろう。 (渡辺, 1970a : 524) (下線は山田による)

【引用⑤】

ヒューマンイズムとは、人間の機械化から人間を擁護する人間の思想である。割切れない始末に困る人間性の認知を不断に持って、懸命にその解決を求め

続ける精神である。ルネサンス期の宗教改革、十八世紀のフランス革命、産業革命、十九世紀の共産党宣言をも一貫して流れている人間の最も人間らしい懸命な努力である。 (渡辺, 1970a : 525-526) (下線は山田による)

中野からの第一の批判は、コミュニスト(共産主義者)の資質についてである。渡辺は【引用③】において「こうした観念の機械」とならぬこと、つまり人間の良心に基づく反戦思想がコミュニストの要であると述べている。故に中野は、その前提となる【引用②】において、「歴史的必然を実証するために、コミュニストは、どうしてもカピタリズムの人々と『戦争』せねばならぬと考えるのであろうか?」という問いそのものが出てくる矛盾を指摘した(中野・渡辺, 1949 : 33)。

この指摘は、日本共産党の国会議員でもあった中野の立場からすれば妥当であるが、中野の目的は渡辺に自らの誤りを認めさせることではなかった。その証左は、中野から渡辺への第二の批判に見取ることができる。

中野からの第二の批判は、渡辺が文章中で使用している「ならば」という仮定表現についてである。

まず中野は、【引用⑤】において渡辺が「ルネサンス期の宗教改革、十八世紀のフランス革命、産業革命、十九世紀の共産党宣言」を「人間の最も人間らしい懸命な努力」と評し、それらに「人間の機械化から人間を擁護する」ヒューマンイズムの思想を認めていることについて、「わたしはあなたの手にわたしの手を重ねます」(p.32)と述べ、深い共感を示した。だからこそ、その前段である【引用④】との矛盾を以下のように指摘した。

あなたは、「人間が機械や制度やイデオロジーや或は神の奴隷となり道具となって、死闘して、必然性に則した人々が生き残るといのが、ルネサンス以後人間の獲得した人間解放の結末ならば、またそれが歴史的必然であるならば、私の主張ごときは、正に甘いも甘い大甘な反動言辭となるだろう。」と書いています。しかし、それならば、それは「ヒューマンイズムとは——ルネサンス期の宗教改革、十八世紀のフランス革命、産業革命、十九世紀の共産党宣言をも一貫して流れている人間の最も人間らしい懸命な努力である。」としたことと文法的に食いちがつて来ぬでしょうか。 (中野・渡辺, 1949 : 33) (下線は山田による)

つまり、【引用⑤】において「ヒューマニズムとは、人間の機械化から人間を擁護する人間の思想」と高らかに宣言するのであれば、その前段（【引用④】）において、人間が機械となって戦争をしたことが人間解放（ヒューマニズム）の結末「ならば」、またそれが歴史的必然である「ならば」と仮定することはできないと異議を唱えたのである。さらに中野は渡辺に対して、「『ならば』が、仮定として成り立つかどうかをしらべる方の仕事をほうり出されている」（p.33）『人間の最も人間らしい懸命な努力』にたいするあなた自身の評価の否定となり兼ねぬ（同）と書簡の中で畳みかけた（下記、下線参照）。

正当な、もしいうならば辛い主張をば、「私の主張の如きは、正に甘いも甘い大甘な反動的言辭であるだろう。」という風を書いて、そのため、その前提となった「人間解放の結末ならば」、歴史的必然であるならばの「ならば」が、仮定として成り立つかどうかをしらべる方の仕事をほうり出されていると思います。それはここで十行ほど飛ばしていえば、あの「人間の最も人間らしい懸命な努力」にたいするあなた自身の評価の否定となり兼ねぬのではないのでしょうか。（中野・渡辺、1949：33）（下線は山田による）

ここまで中野は、渡辺の叙述の一つひとつ切り出しながら『『文法的』といえるようなこと』を批判しており、その指摘も妥当である。ところが一転、中野は続けて次のように呼びかけたのである。

私自身はベシミスティックな人間の一人です。こう書くわたしをあなたが笑わぬだろうとわたしは思います。しかしわたしは、『懸命な努力』は根本的にオプティミスティックなものだと思います。ただわたしがお訊きしたいのは、あなたにああいう『ならば』を書かせたようなことが、あなたの日常の見聞として澤山あるのではないかということです。あるならば、それを聞かせてほしいと思います。（中野・渡辺、1949：33）（下線は山田による）

「批評自身が人間的である」（中野、1996：84）ことを希求する中野が批判を通して成したかったことは、上記の「聞かせてほしい」ということばに凝縮されている。中野は、渡辺という人間を「もっと理解したい」がために、「文法的」な批判を通して自分と渡辺の相違を示したのである。この中野の振る舞いに「互いの

相違を受け止める寛容」を認めることができる。

中野は、渡辺の文章の「外言（話す・書く）」としてのことばの裏にある、未だ表出されていない「内言（思う・考える）」としてのことばにコミュニケートするために、「ただわたしがお訊きしたいのは～」と渡辺の文章に矛盾する「ならば」が出てきた理由を問うている。その渡辺の「内言（思う・考える）」と向き合いたいが為に中野は、「文法的」な批判から一転、中野自身の内面を「私自身はベシミスティックな人間の一人です。こう書くわたしをあなたが笑わぬだろうとわたしは思います。」と隠さずに伝えた。このような中野の振る舞いからは、「意見の相違から生じる不満や緊張とも向き合おうとするスタンス」を見取ることができる。

4.4 渡辺一夫からの応答

中野からの批判と呼びかけに対し、渡辺は〔二通目〕において、「歴史的必然の問題は、正直に申して概念的にまだ私にはあいまいでありました。」（中野・渡辺、1949：34）と切り出しつつ、「人間のための思想」と「強者が弱者を淘汰する現実」との矛盾に対する切なさが「歴史的必然であるならば」を書かせた背景にあったことを述べた（pp.34-35）。

この切なさは「人間が機械になることは避けられないものであろうか？（1948年）」に限ったことではない。大江（1984）は渡辺について「渡辺一夫という人間は、人間の人間らしさを重く考える人であったけれども、つまり人間として自他を励まして、生き延びることをめざす人ではあったけれども、それと共存して、何処か暗い人間認識があった」（pp.17-18）と評し、「暗いところと明るいところを、一緒に持っているものだから、両者をともに提示する場合に、文章に歪みが出てくる場合がある」と指摘している（p.69）。だが、一度も対面したことのない中野が、渡辺の文章の歪みを見付け批判し、その歪みの理由を自らの本心を隠すことなく問いかけたのである。中野からの批判が渡辺の心に深く届いたことは十分推察できる。

その上で渡辺は最後の書簡〔四通目〕の冒頭において、自分自身の文章の真意が伝わりにくい原因について、「仰しやる通り、私の物の書き方が『デリケートすぎる』點は確かに認めねばなりません。（中略）露骨に言へば『臆病すぎる』と申すべきかもしれません。その上、臆病者の癖で文章に多少イロニーを高めようなどといふ下らぬ魂膽もあるかもしれません。大兄に指摘されて、ぎよつとしました。これは、本来人格的な問題ですから、潔く反省せねばならないと信じます。」（p.39）と述べる一方で、『『デリケートな文體』

の持主ですから、他人様に誤解されても甘受せざるを得ないとも申せません。」(同)とコミュニケーションにおいて生じる、自分自身及び未来へのネガティブな期待(コミュニケーションに纏わるペシミズム)を表出している。

中野からの批判によって、渡辺は自身の内面に起こった「反省」と「コミュニケーションに纏わるペシミズム」とどのように向き合ったのだろうか。その手がかりを、後の1951年に発表された渡辺の評論「寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容になるべきか」(渡辺, 1970b: 162-174)の末文に認めることができる。

渡辺は、人間が未来に対する期待を持ったとしても、現実には弾圧や戦争という不寛容によって社会の秩序を守ることがまかり通ってしまうことについて、以下のように締めくくった。

歴史は繰り返す、と言われる。だからこそ、我々は用心せねばならぬのである。しかし、歴史は繰り返すと称して、聖バルトロメオの犠牲を何度も出すべきだと言う人があるならば、またそういう人々の数が多いのであるならば、僕は何も言いたくない。しかし、そんな筈はなかろう。そんな愚劣なことはある筈はなかろう。また、そうであってはならぬのである。(渡辺, 1970b: 173) (傍点は渡辺, 下線は山田による)

下線部の「ならば」の仮定法は、評論「人間が機械になることは避けられないものであろうか?」の【引用④】よりも、慎重に使用されている。具体的には、中野との間で問題となった「歴史的必然」を認めない姿勢がわかるように、「だからこそ～」を入れ、締め「しかし、そんな筈はなかろう。また、そうであってはならぬのである。」と述べることで、渡辺の内面にある「人間のための思想」と「強者が弱者を淘汰する現実」との矛盾に対する切なさを力強く押し返し、「不寛容に対して不寛容たるべきでない」(渡辺, 1970b: 163)と強く主張しているのである。

現代もなお多くの人々に読み継がれる渡辺の寛容論は、中野からの批判によって表面化した「コミュニケーションに纏わるペシミズム」(デリケートな文体が招く誤解は甘受せざるを得ない)、さらには渡辺の内面にある思想と現実の矛盾が生みだす葛藤を乗り越えようとした渡辺からの応答であると考えられる。

4.5 「往復書簡」についての考察

ここまで、中野・渡辺「往復書簡」に見られるコミュ

ニケーションについて、「コミュニケーションに纏わるペシミズム」とそれを乗り越えるための「互いの相違を受け止める寛容」という二つの視座より検討してきた。

その結果、互いの相違を受け止める寛容は、(1)相違の維持のために、相違の内容を丁寧に示そうとする、(2)相違する部分について、「外言(話す・書く)」としてのことばだけでなく、そこ表れていない意図や理由(「内言(思う・考える)」)としてのことば)に関わろうとする、(3)(2)の際には、互いが抱えている不安や本心をできるだけ隠さずに伝えようとするという三つのスタンスを内包していることが見えてきた。

最初の二つのスタンスが満たされることが三つ目のスタンスの条件であり、この三つ目のスタンスが確保されたときに、コミュニケーションに纏わるペシミズムが語られる。そのペシミズムの克服は、議論や対話の最中になされるものばかりではないが、自身の抱えるコミュニケーションに纏わるペシミズムを語ることで自分が克服に向けた第一歩であると考えられる。

今までことばで表すことがなかったネガティブな期待をことばによって言い表すことによって、見えなかった不安や困難を自分と相手とのあいだで意識化できるようになる。渡辺が、『『デリケートな文体』の持主ですから、他人様に誤解されても甘受せざるを得ない』と語りつつも、その文体を生かして自らの主張を書き綴ったように、克服する対象を捉えることができたとき、克服へと踏み出すことができると考える。

5. コミュニケーションに纏わるペシミズムを乗り越える教育への展望

本稿では、自分と意見が相違している、若しくは相違していることが予想される他者とのコミュニケーションに纏わるペシミズムを乗り越えるための思想的基盤を検討してきた。最後に、本稿で得られた知見から導かれる教育への展望を述べる。

「問題の所在」で述べたヒナタの語りと萩中(2020)の指摘は、コミュニケーションに纏わるペシミズムの内実には、人と人のあいだにある「外言(話す・書く)」としてのことばの相違だけでなく、「内言(思う・考える)」としてのことばの相違も大きく絡んでいることを示唆していた。だからこそ、相違する意見が提示されたとき、場の「沈黙」に埋め込まれている「内言(思う・考える)」としてのことばを表出できる機会を設けることが重要である。

「往復書簡」の中野は、渡辺の意図や理由(「内言(思う・考える)」)としてのことば)に関わるために、「自

分がなぜそれを問うているのか」を先に述べ、その中で本心を語っていた。教室において意見の相違が見られるとき、相手に「自分が聞きたいこと」だけを問うのではなく、相手に問いかける者自身の不安や本心をできるだけ隠さずに伝えながら「語られていない意図や理由」に語りかけていくことが、相手の「内言（思う・考える）」としてのことばまでも表出させ、互いが抱えるコミュニケーションに纏わるベシミズムに気づく契機になると考える。つまり、問いかける側・聞く側がまず「互いの相違を受け止める寛容」を発揮するのである。

こうした中野と渡辺の「往復書簡」に関する考察から得られた知見から導かれるのは、相違の維持のために、相違の内容を説明する機会を増やすことの教育的価値である。現在の学校教育では、とすれば「自分の考え」をつくり発表したとしても、発表された考えの中から最も教師の意図に沿ったものが釣り上げられ、他の考えは捨象されて終わりがちである。それが、相違する考えの中から最も優れた考え（教師の正解）を代表者がスポットライトを浴びながら説明するという授業文化に繋がっている。よって、学習者に、相違する一つひとつの考えを維持するために相違の内容を説明したり聞いたりする体験（それを要する学習課題）を設けることで、「相違はいずれ不寛容を導く」というコミュニケーションに纏わるベシミズムを緩和させる可能性が開かれる。

今後は、伝わらない部分や受け入れられない部分を示し、その背景にある本心と向き合い続けるという「相違との対話」を教育の中でどのように展開するかを検討していきたい。

【引用参考文献】

- Beck,A.T., Wessiman,A., Lester,D., Trexler,L. (1974) The measurement of pessimism: the hopelessness scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 861-865.
- Teresa M. Bejan (2017) Mere Civility: Disagreement and the Limits of Toleration, *Harvard University Press*.
- Teresa.M.Bejan (2018) Is civility a sham? website:https://www.ted.com/talks/teresa_bejan_is_civility_a_sham/transcript (2021年7月5日確認)
- ヴォルテール (1763) 斉藤悦則訳 (2016) 『寛容論』

- 光文社古典新訳文庫
- 大江健三郎 (1979) 「ベシミズムの問題：中野重治と渡辺一夫」『文学界』11月号, 文藝春秋, 260-263
- 大江健三郎 (1984) 『日本現代のユマニスト 渡辺一夫を読む』岩波書店
- シップリー(1945)梅田修・眞方忠通・穴吹章子訳(2009) 『シップリー-英語語源辞典』大修館書店
- ショーペンハウアー (1819) 西尾幹二訳 (2004) 『意志と表象としての世界 I・II・III』中央公論社
- ショーペンハウアー (1851) 斎藤信治訳 (1979) 『自殺について』岩波書店
- 谷冬彦 (2002) 「絶望感尺度の構造に関する研究」『神戸大学発達科学部研究紀要』第9巻第2号, 17-27
- 遠山義孝 (2014) 『ショーペンハウアー』清水書院
- 中野重治 (1996) 「批評の人間性 一 (1946年)」『中野重治全集第十二巻』筑摩書房, 84-94
- 中野重治・渡辺一夫 (1949) 「往復書簡」『展望』3月号, 筑摩書房, 31-41
- 萩中奈穂美 (2020) 「創造的な対話を実現する能動的な聞き手の育成：「沈黙」に着目して」『月刊国語教育研究』2月号, 42-49
- 森本あんり (2020) 『不寛容論：アメリカが生んだ「共存」の哲学』新潮社
- 山田深雪 (2019) 「教育を学ぶ学生の対話観に関する考察：オープンダイアログの理論を援用した対話実践をもとに」『玉川大学教師教育リサーチセンター年報第』第10号, 105-115
- ロック (1689) 加藤節・李清和訳 (2018) 『寛容についての手紙』岩波文庫
- 渡辺一夫 (1970a) 「人間が機械になることは避けられないものであろうか? (1948年)」『渡辺一夫著作集10偶感集上巻』筑摩書房, 503-528
- 渡辺一夫 (1970b) 「寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容になるべきか (1951年)」『渡辺一夫著作集11偶感集中巻』筑摩書房, 162-174
- 渡辺一夫 (1971a) 「フランス・ユマニズムの成立 (1950年-1958年)」『渡辺一夫著作集5ルネサンス雑考下巻』筑摩書房, 185-392
- 渡辺一夫 (1971b) 「フランス・ルネサンスの人々 (1946年-1964年)」『渡辺一夫著作集4ルネサンス雑考中巻』筑摩書房, 189-458
- 【附記】本稿は、JSPS 科研費 JP19K23296の助成を受けた。